

海外MBA受験ノウハウまずはGMAT攻略 エッセー、面接で差をつける

MBA対策には 1000時間が必要

アメリカを中心としてヨーロッパ、アジアへのMBAや大学院留学を支援するアゴス・ジャパン代表取締役会長の横山匡さんに海外ビジネススクール受験について話を聞いた。

「当校の学生は企業派遣、私費留学を問わず、受験数は4校から6校が平均的。もちろん2校しか受験しない人から10校受ける人もいます」

しかしどの学生も、一般的に海外のビジネススクールに入学したいと思つたら2年前から準備が必要であるという。仮に09年の9月入学を考えているのであれば、07年の夏から準備が始まる計算だ。

「私たちは準備開始から出願までにかかる準備時間の目安をロードマップとして作っていますが、勉強時間は合計で約1000時間を要します。TOEFLの対策に半年、8カ月、GMAT対策に半年、推薦状、エッセーなど出願の準備に半年かかると計算しています」

もちろん同時進行で準備を進めることもできるのだが、仕事と両立し

ながら勉強時間を調整していくのはかなり大変だ。

「トップ校を狙うならTOEFLは105点を指す必要があります。GMATは680点以上なら全体受験者のトップ10%、640点以上ならトップ20%に入る計算です。学生には600点後半から700点を指して勉強していくことを目標にしています」

TOEFLでは、「Official Guide to New TOEFL iBT」、GMATでは、アルク社の「MBA留学GMAT完全攻略」が学生に人気。MBA出願者の大多数がスコアアップのため購入している定番の本だ。

ちなみにGMATのVerbalセクションは、日本人受験生にとって非常に難しい内容のため、Mathセクションで満点近くを出すことがトップ校合格の絶対条件となる。

「GMAT攻略には解法のコツをつかむことが重要であるため、長い時間かけて勉強をしても得点は必ずしも上がりません。6カ月から8カ月くらい集中して学習を行い、高得点を出す方が多いです」

しかしこの2つが高得点をマーク

したからといって油断はできない。エッセー、インタビュー（面談）と推薦状で逆転負けも多いにある。トップ校になればなるほど、これらが大きなカギとなる。今まで培われた自分の職務経験、ビジネスパーソンとしての将来性がエッセーを通じて大学院の入学審査官によって審査されるというわけだ。

「ビジネススクールの過去の課題を研究していくことも必要ですが、日本人はそもそも主旨を語るのが苦手なので、そこを訓練していかなければならない」

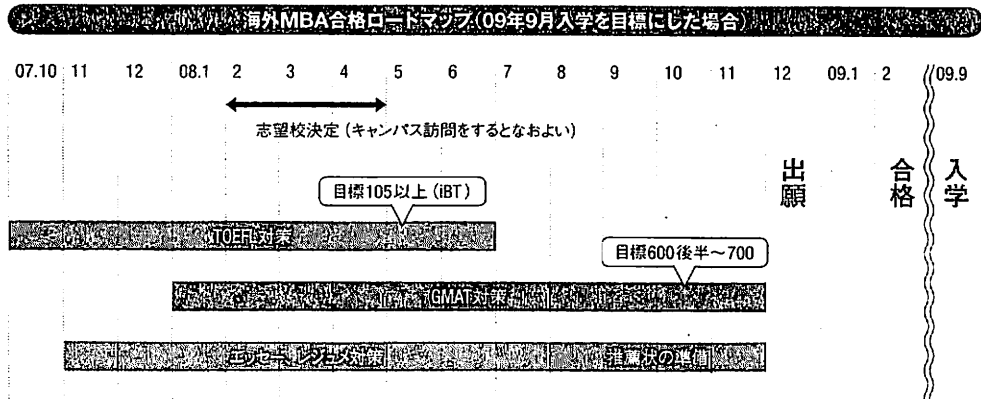


アゴス・ジャパン代表取締役会長
横山 匡さん

UCLA言語学部卒業。1998年より現職。(2007年4月、ザ・プリンストン・レビュー・オブ・ジャパンをアゴス・ジャパンにリニューアル)。幼少時代、イタリア、アメリカで育つ。20年以上にわたり、語学教育、留学指導に携わり、海外における国際教育学会などにおいてもセミナー講師として招待されるなど、留学指導の代表的存在。

GMAT…ビジネススクールの入学審査に必要な適性試験。英語と数学、分析力などを見る。得点は200~800点。トップ校に合格するには650点以上が必要といわれる。
TOEFL…英語を母国語としない人が、大学や大学院で勉強するうえで支障がないと思われる英語力があるかどうかを測るテスト。得点は0~120点。(Internet-Based Testing (IBT)の場合)。トップ校に合格するには目安としてIBT100~110点が必要といわれる。※以前はComputer-Based Testing (CBT) が主流だったが06年に廃止。CBTの得点は0~300点。

何かと準備が必要な海外受験。働きながら準備を進めるのなら、期間の目安は約2年だ。GMAT(適性試験)のスコアアップのコツは「短期集中」にあった。



MBA受験の必須アイテム

① 『The Official Guide for GMAT Review』(ペーパーバック) Gmac (著)
GMAT対策の必需品。MBA受験におけるテスト対策以外(レジュメ、推薦状、エッセーなど)のアドバイスも非常に参考になる。

② 『日本人のためのMBAベストスクールガイド』インターフェイス(著)
MBA校1つひとつの特徴がよく整理されていて、学校ごとの特徴を把握するのによい。

③ 『How to Get into the Top MBA Programs (How to Get into the Top MBA Programs)』Richard Montauk(著)
エッセーのサンプルが非常に多く、エッセー対策として活用できる

面接でよくある質問

① 「あなたは、このビジネススクールでどんなことを学びたいですか？」

解説
「MBAが自分にとってどういう意味を持つものなのか」の整理、「優先順位の明確化」そしてインタビューに理解できるように答えるということが大切です。(横山さん)

② 「このビジネススクールを修了したら、どのような人生を歩みたいと思っていますか？」

解説
個々の価値観やビジョンのコアの部分を固められて理解したほうがよいでしょう。そのうえで、長期のビジョンに対して短期の目標がどうつながっていくのか、を簡潔に伝えましょう。インタビュー(面接)は「答えは簡潔に」が鉄則です。そこがエッセーと異なる点です。中身も大切ですが、それを相手の心に届かせる「コミュニケーション」がさらにカギとなります。(横山さん)

金銭面のごは受かってから考えてもよい

アメリカ、ヨーロッパ、アジアで必要なお金の目安は、ずいぶん違ってくる。アメリカのビジネススクールは2年制が主だが、ヨーロッパのほとんどのビジネススクールは1年で修了するので、期間が短い分生活費は安く済む。近年、社費で社員を派

遣する企業も増えつつある中国も、物価が安いいため、生活費は安く抑えられる。ヨーロッパ、アジアに比較すると、アメリカの留学費用は高い。年間の授業料が4万ドル近い学校では、2年で修了するまでに生活費も含めておよそ1500万円が必要なお金の目安だ。

しかし、費用の心配は受かってからでも遅くない、と横山さんは言う。「アメリカのビジネススクールに行く学生は、貯金と学生ローンと、あとはインターンで稼ぐお金で工面するパターンがほとんどです。つまり借りる覚悟があれば、学校が奨学金、ファイナンシャルエイドと呼ばれる学生ローンなどがお金を貸してくれるのです。費用のことは、最初から心配しなくても、合格したらとれるオプションはあります」

スクール訪問のチェックポイント

- ① 授業見学は必須。各学校の違いが分かる
- ② 入学審査事務官に会い、校風をよく知る
- ③ 家族同伴の場合は、生活環境を調べる
- ④ 在校生を見つけ、本やブログではない生の声を聞く

推薦者は自分を理解してくれている人に頼む

推薦状は2、3通が普通であるが、日本人が書く場合インパクトが弱いことが多い。出願者のことをどこまで理解して書いた推薦状かどうか、可否のカギを握る。志願者の人物、資質、将来性を入学審査官に受け入れてもらえるような書き方がされていなくてはならない。

「例えば、その推薦する人物のこ

れまでのビジネス経験をケーススタディーとして書き上げていくことは必要でしょう。推薦状を書く人は学校のことを細かく知る必要はありませんが、各学校に向けてカスタマイズしていく必要はあると思います」

キャンパス訪問については、「出願する年(年末から年初)の8、9カ月前、つまり春ごろに行うのがベスト」と横山さん。入学を希望するビジネススクールを数校に絞り込み、1週間くらいで訪問できるようにスケジュールを組んでいく。学校に予約を入れて、教授や在校生に会って

学校が求める資質などが垣間見えてくると思えます。それが、エッセーや推薦状に生かされると思います。あと、キャンパスを訪問している際、最後に学校側から呼ばれることもあります。いわゆる個人面接をここでいい、入学審査が終了する人もまれにあるのです。しかし一般的にはキャンパス訪問は、学校を絞る最終課程と思っただけがいいでしょう」

学校が求める資質などが垣間見えてくると思えます。それが、エッセーや推薦状に生かされると思います。あと、キャンパスを訪問している際、最後に学校側から呼ばれることもあります。いわゆる個人面接をここでいい、入学審査が終了する人もまれにあるのです。しかし一般的にはキャンパス訪問は、学校を絞る最終課程と思っただけがいいでしょう」

海外MBAに必要なお金の目安(学費、生活費)

アメリカ・ニューヨークの場合	
学費	9万ドル(私立大に2年通ったとして)
生活費	3万8000ドル(2年分。学寮に入ったとして)
書籍その他	1万8000ドル
合計	14万6000ドル (約1680万円。1ドル=115円で計算)

フランス・リヨンの場合	
学費	3万9000ユーロ(16カ月)
生活費	8576ユーロ (16カ月分。学寮に入ったとして)
書籍その他	8110ユーロ
合計	5万5686ユーロ (約890万円。1ユーロ=160円で計算)

中国・香港の場合	
学費	23万7600香港ドル (16カ月分。通常は2年制が多い)
生活費	10万香港ドル (16カ月分。学寮にはいることを前提として、寮費、食費、テキスト等を含む)
合計	33万7600香港ドル (約510万円。1香港ドル=15.2円で計算)